

変貌一女性患者ハリマ・光と影

保守的なイスラムの世界で女たちのことを語るのは容易ではない。外国人が町で接するの普通上流の西欧化した女たちで、山岳地帯に行く登山家は堅くベールに顔を閉ざして逃げ去る女たちに面食らう。「女の写真を撮って殺された」などと聞くとなおさらである。西欧の女性解放論者は「男による女性虐待」に金切声を上げるかと思えば、主人の仇討ちに息子を駆り立てる母親に「野蛮だ」と罵声を浴びせる。要するに外国人には理解できないのである。

十年もペシャワールに居て、実は私もよく分からない。男たちは滅多に女の話をしなないし、尋ねもしない。外国人の解釈や異文化論がさらに解らない。「イスラムの後進性」をまくし立てる西欧の論客の饒舌にも、反感を通り越してあくびが出る。私が解らない理由は、おそらく自分が男に生まれてきたからで、永遠に分からないだろう。それは「異文化」を理解するよりも困難だ。だが確実なのは、彼女らはその社会の中でふさわしい、女としての地位と役割を十分演じているということだ。日本人にそれが解らなくなったのは、西欧化した「教養」と共に、共同体への所属感を喪失した個人意識が無用な邪魔をするからである。パシユトゥンの女たちにはそれぞれ個性的な顔がある。近代化された自我にはそれがない。日本の女たちには少ない輝き、あくの強さ、しふとさと弱さ、高貴と邪悪が率直にとなり合っている。

「アフガニスタン——それは光と影です」というのが、私の好む一見真面目なはぐらかし文句である。現地に居て人情の機微を解する者は苦笑いしてうなずくことだろう。だが、光が強ければ影も強い。強烈な陽光と陰影のコントラストは、現地の気風である。暗さが明るさに転ずるという奇跡を私は信ずる者である。この事を一人のパシユトゥンの女から学んだ。

